

Title	プルーストの文学的・芸術的教養：『プルースト書簡集』作品別および作者別索引に基づく統計的分析の試み
Author(s)	和田, 章男
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2001, 41, p. 51-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9462
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

プルーストの文学的・芸術的教養

—『プルースト書簡集』作品別および
作者別索引に基づく統計的分析の試み—

和田 章 男

プルーストはその生涯において、どんな書物を読み、どんな絵画を見て、どんな音楽を聞いたのか。彼の畢生の大作『失われた時を求めて』において言及される文学・芸術作品の数の多さおよび幅の広さからもその著者の教養の広さを推察するに十分であるが、それらは小説の目的、意図に必要なものであって、厳密な取捨選択を経た上で採用されたものである。作家プルーストの文学的・芸術的教養に焦点を合わせようとするならば、その作品がいかにか長大なものでも、また彼の文学観、芸術観のエッセンスが表明されていようとも、そこにおいて言及されている文学・芸術作品を考慮するだけでは不十分である。また、プルーストの蔵書がどのようなものであったかも全く知られていないと言ってよい。たとえそれが分かったとしても、彼の教養の広さ、深さを測る上で有効とは言えない。というのも彼にとって、書物は精神的に所有すべきものであって、物質的に所有することに意味はないからだ。実際プルーストは友人から多くの本を借りており、自分が書いた論考でさえ友人から借りているほどである。⁽¹⁾つまり彼は愛書家ではなかった。⁽²⁾プルーストの文学的・芸術的教養を知る上できわめて貴重な資料となるのは、彼がその生涯にわたって書き続けた膨大な数の書簡である。

フィリップ・コルブが1970年から1993年にかけて、まさしく学者人生のすべてを費やして編纂した『プルースト書簡集』全21巻は、プルーストという作家を知るばかりでなく、彼が生きた時代の社会、文化、政治、風俗、流行などを知る上でも第一級の資料となっている。⁽³⁾この書簡集が完成されるや、それに基づいていくつかの重要な伝記が書かれ、草稿研究の進展ともあいまって、プルースト研究は躍進したと言えよう。ところでコルブの『書簡集』には人名索引が付けられているが、それは必ずしも完全なものではないため、吉川一義氏をはじめとする日本のプルースト研究者約40名が結集して、4年の歳月をかけて『プルースト書簡集の総合索引』*Index général de la Correspondance de Marcel Proust* (1998) ⁽⁴⁾を完成させた。これは人名、地名、作品名にわたる文字通り総合的な固有名詞の索引であり、作品名に關してはさらに作者別に分類した索引を付けている。人名について言えば、架空の名も採用

したこと、ファースト・ネームだけのものや、また叔父や叔母、医者、秘書なども誰であるか同定したこと、生年没年、職業のみならず、複雑な家族関係の中に位置づけたことなど、コンピューター処理では不可能な作業であって、プルーストの専門家の知力と労力の成果であると言える。

また、ITEMのプルースト班では1998年10月以来、コルブ編集の『書簡集』に基づいて、プルーストの「書斎」を再現しようという計画を立て、書簡に見られる文学作品の引用、言及、暗示などの網羅的な調査、検討を始めている。これまでのところ1883年から1904年までの期間の書簡に関して650項目あまりのカードを作成した旨、Julie LambilliotteがBIP第30号⁽⁵⁾において中間報告をしている。実際のところ、プルーストがどのような本を読み、どのような感想を抱き、どんな批評をしているかを知るには、このような個別かつ総合的な調査が必要であろう。本論考では、上記の『プルースト書簡集の総合索引』の作品別索引 (Index des titres d'œuvres et de périodiques) および作者別索引 (Index des titres classés par noms d'auteurs) に基づいて統計的分析を試みるのであるが、次に述べる通り、統計である限り数を問題にするわけで、いきおい大ざっぱで表面的な分析にならざるをえない。しかしながら全体的な傾向をつかむことは可能であろう。また、プルースト班の研究は、調査対象が膨大であるため、絵画、音楽、オペラなどの作品は省き、文学作品のみを対象としているが、われわれの統計は主な文学・芸術ジャンル全体に及んでいる。

統計的分析の目的と問題点

目的が何かということが最大の問題である。統計的分析においては数が問題となるが、数の多少がどういう意味を持つのか。頻度数の多少は必ずしもプルーストの好悪、あるいは影響度を反映しているわけではない。しかしながら、肯定的であるか否定的であるか、賛美しているか批判しているかを問わず、広い意味での関心度、あるいは知識度を測ることができるのではないか。もちろん、その意味するところは個別に検討する必要があるだろう。たとえば、ロベール・ド・モンテスキウやアンナ・ド・ノアイユなどの作品への言及には社会的、儀礼的な側面があるだろう。ラスキンなら文学的・芸術的関心度の高さを示し、ラ・フォンテーヌ、モリエールなどの古典作家の場合は知識・教養的側面を表していると言えよう。

二つ目の問題点は技術的な面にかかわる。以下の分類表に記す作品数および頻度数には、プルーストの文通相手の手紙において言及された作品、またコルブの序文および注において言及されている作品も含まれているということである。しかしながら、コルブの序文や注は書簡の中で言及、引用、暗示された作品を挙げているのであるから、数に入れることに支障はないと考えた。また文通相手の書簡に関しては、プルーストが読み、かつ両者の間で話題になっている作品とみなすことによって、プルースト的文脈に置き換えることが可能である

と思われる。いずれにせよ、プルーストが受け取った手紙は散逸してしまったのか、『書簡集』に収められているのはプルーストの手紙が圧倒的に多く、統計的分析においてそれほど問題でないようにも思われる。

分類の方針

(1) ジャンル別区分：作品を文学，哲学・思想，美術，音楽の4つのジャンルに分類し，文学に関しては，さらにフランス文学，古代ギリシャ・ローマ文学，外国文学に分ける。

(2) 時代別区分：上記のうちフランス文学については，中世，16世紀，17世紀，18世紀，19世紀，同時代というように時代別に分類する。

(3) 科学書，歴史書，また特に「同時代」の評論の類は煩瑣になるため省略する。ただし，プルーストと縁が深く，作品数も多い重要な評論家の作品（たとえば，アンドレ・ボーニエ，チボーデなど）は採用し，イタリック体にして示す。創作と評論の両方を書いている場合は立体で示す。

(4) 画家でありながらも，言及されている作品の大部分が評論であるようなジャック＝エミール・ブランシュのようなケースは「文学 (同時代)」の中に入れ，イタリック体にする。ただし，モーリス・ドニ，ウィリアム・モリスなども評論が言及されているだけだが，美術家としての知名度から「美術」に分類して，イタリック体にする。

(5) 分類表において，それぞれの作家名の右に2つの数字を並列しているが，左の数字は作品数（個々の詩片の題名および章の題名も含む），右の数字は頻度数を示す。例えば，文学 (19世紀) の《Balzac 46-135》の場合は，バルザックの46作品が合計135回言及されていることを意味している。

(6) *œuvres, œuvres complètes* は省略するが，*correspondance, journal* は採用する。

(7) 「文学 (同時代)」に関しては，作品数が1，頻度数が2以下のものは統計的分析においては意味がないと判断し，省略する。ただし，他の時代および他のジャンルについては数が少なくても採用する。

(8) 世紀転換期に活動した作家の分類は確かに困難である。特に「19世紀」とプルーストの「同時代」とのどちらに分類すべきかむずかしい場合があるが，19世紀中頃に生まれ，19世紀末から20世紀初めにかけて活動した作家，およびプルーストが直接知っていた作家は「同時代」に分類する。

(9) 言うまでもなく，プルーストの作品は省く。

【表1】ジャンル別および時代別分類

ジャンル	
文学 (中世)	Augustin (saint) 4-4, Hildegarde (sainte) 5-5, La Salle (Antoine de) 2-4, Thomas d'Aquin 1-2, Villon (François) 1-1, Voragine (Jacques de) 3-5
文学 (16世紀)	Aubigné (Agrippa d') 3-9, Montaigne 3-12, Passerat (Jean) 2-2, Rabelais 2-2, Ronsard (Pierre de) 2-2
文学 (17世紀)	Boileau 5-13, Bossuet 4-5, Bourdaloue (Louis) 5-5, Corneille 7-35, La Bruyère 5-16, La Fayette (Mme de) 1-5, La Fontaine 34-110, La Rochefoucauld 2-6, Malherbe (François de) 9-12, Molière 20-105, Perrault (Charles) 1-2, Racine 12-123, Regnard (Jean-François) 2-2, Saint-Simon 2-31, Sévigné (Mme de) 1-13, Tallemant des Réaux 1-3, Vauvilliers (Théophile) 2-3
文学 (18世紀)	Beaumarchais 1-2, Buffon 2-2, Chamfort (Nicolas de) 2-2, Chénier (André) 3-3, Diderot (Denis) 1-2, Duclos (Charles-Pinot) 1-1, Favart (Charles-Simon) 4-4, Joubert (Joseph) 3-6, Laclos (Pierre de) 1-2, Lemierre (Antoine-Marin) 2-2, Lesage 1-1, Marivaux 2-2, Montesquieu 2-8, Prévost (abbé) 1-6, Rousseau (Jean-Jacques) 4-11, Bernardin de Saint-Pierre 2-2, Vauvenargues 1-1, Voltaire 9-18
文学 (19世紀)	Balzac 46-135, Banville (Théodore) 4-7, Barbey d'Aurevilly 6-8, Barbier (Jules) 3-4, Baudelaire 50-218, Béranger (Pierre-Jean de) 3-3, Bisson (Alexandre) 2-7, Bouilhet (Louis) 2-2, Bourget (Paul) 7-13, Brunière (Ferdinand) 3-3, Chateaubriand 10-42, Chivot (Henri) 2-3, Clairville (Nicolae) 2-3, Constant (Benjamin) 1-9, Cros (Charles) 3-3, Desbordes-Valmore (Marceline) 9-16, Dumas (Alexandre) 9-18, Dumas fils 1-4, Feuillet (Octave) 4-6, Flaubert (Gustave) 13-98, Fromentin (Eugène) 4-17, Gautier (Théophile) 18-33, Gobineau (Arthur) 3-11, Goncourt (Edmond) 6-17, Goncourt (les frères) 8-63, Halévy (Ludovic) 6-16, Hello (Ernest) 2-2, Heredia (José-Maria de) 5-15, Hugo (Victor) 57-178, Huysmans (Joris-Karl) 3-8, Karr (Alphonse) 3-3, Labiche (Eugène) 7-14, Lafarge (Marie-Fortuné) 2-2, Lamartine (Alphonse de) 19-31, Leconte de Lisle 8-9, Mallarmé 17-35, Maquet (Auguste) 3-9, Maupassant 13-16, Meillac (Henri) 8-19, Mérimée 6-19, Millevoye (Charles-Hubert) 2-2, Musset 43-98, Nerval 11-23, Ponsard (François) 1-3, Renard (Jules) 1-1, Rimbaud 2-2, Sainte-Beuve 18-56, Saint-Victor (Paul Bins de) 2-2, Sand (George) 6-11, Sandeau (Jules) 2-3, Sardou (Victorien) 3-11, Scribe (Eugène) 4-7, Silvestre (Armand) 3-3, Sorel (Albert) 8-12, Staël (Mme de) 2-2, Stendhal 7-38, Sue (Eugène) 2-3, Sully Prudhomme 23-50, Thierry (Augustin) 4-5, Verlaine (Paul) 23-50, Verne (Jules) 5-7, Vigny (Alfred de) 16-78, Villiers de l'Isle-Adam 4-11, Zola (Emile) 13-25
文学 (同時代)	Adam (Paul) 1-3, Arène (Emmanuel) 2-20, Arman de Caillavet (Gaston) 15-45, Astruc (Gabriel) 3-4, Barrès (Maurice) 57-135, Bataille (Henry) 14-30, <i>Beaunier (André)</i> 22-24, Benda (Julien) 6-7, Benois (Pierre) 3-7, Bernard (Tristan) 2-3, Bernstein (Henry) 9-27, Bibesco (Antoine) 11-32, Bibesco (Marthe) 8-17, Binet-Valmer (Gustave) 9-24, Bizet (Jacques) 2-2, <i>Blanche (Jacques-Emile)</i> 35-147, Blum (Léon) 10-15, Bonnard (Able) 7-14, Bordeaux (Henry) 35-49, Boulenger (Jacques) 20-49, Boulenger (Marcel) 6-6, Boylesve (René) 20-51, Breton (André) 1-3, Bultheau (Augustine) 2-3, Capus (Alfred) 4-6, Chadourne (Louis) 6-6, Chardonne (Jacques) 1-4, Claudel (Paul) 15-24, Cocteau (Jean) 39-87, Colette 14-21, Copeau (Jacques) 2-2, Crémieux (Benjamin) 3-3, Croisset (Francis de) 11-41, Curel (François de) 5-9, Daireaux

	<p>(Max) 23-27, Danseny (Robert) 4-12, Daudet (Alphonse) 23-43, Daudet (Julia) 30-69, Daudet (Léon) 64-158, Daudet (Lucien) 35-91, Decourcelle (Pierre) 3-5, Desjardins (Paul) 4-9, Des Rieux (Lionel) 2-2, Desvallières (Maurice) 2-8, Donnay (Maurice) 7-12, Dorgelès (Roland) 3-22, Dreyfus (Robert) 26-60, Du Bos (Charles) 5-9, Duhamel (Georges) 2-2, Duplay (Maurice) 7-21, Duru (Alfred) 3-4, Duvernois (Henri) 5-8, Essebac (Achille) 3-3, Estaunié (Edouard) 2-3, <i>Faguet (Emile)</i> 6-6, Fernandez (Ramon) 3-7, Ferval (Claude) 5-11, Feydeau (Georges) 5-25, Flament (Albert) 7-11, France (Anatole) 54-144, Gasquet (Joachim) 2-4, Gautier (Judith) 3-5, Geffroy (Gustave) 7-9, Gérard (Rosemonde) 3-3, Ghéon (Henri) 13-15, Gide (André) 25-122, Giraudoux (Jean) 9-20, <i>Gourmont (Rémy de)</i> 5-6, Gregh (Fernand) 60-138, Gregh (Harlette) 4-4, Halévy (Daniel) 15-26, Hallays (André) 11-12, Hauser (Lionel) 9-15, Hermant (Abel) 15-31, Hervieu (Paul) 13-27, Humières (Robert d') 2-3, Jaloux (Edmond) 11-25, Jammes (Francis) 17-23, Jarry (Alfred) 1-5, Knoblauch (Edward) 1-13, Lacretelle (Jacques de) 5-19, Lahor (Jean) 2-2, Larbaud (Valery) 3-7, La Rochefoucauld (Gabriel de) 3-13, La Salle (Louis de) 9-13, <i>La Sizeranne (Robert de)</i> 5-5, Lauris (Georges de) 7-48, Léautaud (Paul) 2-9, <i>Lemaître (Jules)</i> 8-13, Levet (Henry) 3-4, Loti (Pierre) 5-13, Louÿs (Pierre) 4-9, Mac Orlan (Pierre) 2-4, Magre (Maurice) 2-10, Martin du Gard 5-5, Mauriac (François) 9-12, Maurras (Charles) 7-13, Mendès (Catulle) 7-23, Mendès (Mme Catulle) 2-2, Mielvaque (Marcel) 3-5, Mille (Pierre) 2-2, Miomandre (Francis de) 4-6, Mirande (Yves) 2-5, Montesquiou (Léon de) 2-2, Montesquiou (Robert de) 250-810, Montherland (Henry de) 2-2, Morand (Eugène) 3-4, Morand (Paul) 31-164, Moréas (Jean) 1-3, Moreau (Emile) 1-5, Mourey (Gabriel) 2-13, Muhlfeld (Lucien) 3-4, Müller (Charles) 1-4, Noailles (Anna de) 106-299, Ohnet (Georges) 2-3, Péguy (Charles) 3-4, Pérochon (Ernest) 1-5, Peter (René) 6-16, Philippe (Charles-Louis) 4-6, Pierrebouurg (Marguerite de) 6-10, <i>Pierrefeu (Jean de)</i> 14-17, Pinero (Arthur Wing) 2-2, Poirson (Mme Paul) 6-6, Porte-Riche (Georges de) 10-31, Pougy (Liane de) 2-2, Prévost (Marcel) 8-16, Rachilde 5-5, Reboux (Paul) 5-12, Régnier (Henri de) 39-70, Régnier (Marie de) 3-3, <i>Reinach (Joseph)</i> 12-36, Richepin (Jean) 3-3, Rivière (Jacques) 18-71, Rivoire (André) 2-2, Robert (Louis de) 10-44, Rolland (Romain) 11-29, Romains (Jules) 3-10, Rosny aîné 14-18, Rostand (Edmond) 3-6, Rostand (Maurice) 6-9, Salmon (André) 4-5, Saussine (Henri de) 7-14, Schlumberger (Jean) 4-9, <i>Séché (Léon)</i> 8-9, Sée (Edmond) 1-6, <i>Souday (Paul)</i> 13-17, Soupault (Philippe) 2-4, Suarès (André) 2-3, <i>Thibaudet (Albert)</i> 16-21, Berr de Turique (Julien) 1-6, Valéry (Paul) 9-15, <i>Vandérem (Fernand)</i> 8-13, Van Oosterwyck 1-3, Vaudoyer (Jean-Louis) 31-43, Vernayre 1-9, Vettard (Camille) 4-29, Zamacoïs (Miguel) 2-3</p>
<p>古代ギリシャ・ローマ文学</p>	<p>Cicéron 4-5, Eschyle 2-4, Hérodote 1-1, Hésiode 2-2, Homère 2-22, Horace 7-20, Juvénal 1-3, Mélégre 1-1, Ovide 2-4, Sénèque 2-2, Sophocle 4-6, Suétone (Caius) 2-5, Térence (Publius) 1-1, Théocrite 3-5, Virgile 5-40</p>
<p>外国文学</p>	<p>Barrie (James Matthew) 2-3, Bosschère (Jean de) 3-3, Brontë (Emily) 3-4, Browning (Robert) 1-1, Butler (Samuel) 2-2, Byron 2-3, Cervantès 1-2, Clayton (Joseph) 3-3, Conrad (Joseph) 2-3, D'Annunzio (Gabriele) 11-32, Dante 2-6, Defoe (Daniel) 1-2, De Quincey (Thomas) 2-3, Dickens (Charles) 1-2, Dostoïevski 4-33, Doyle (Conan) 4-5, Eckermann (Johan Peter) 1-3, Eliot (George) 5-26, Emerson (Ralph Waldo) 15-21, Galsworthy (John) 3-3, Goethe 7-21, Hardy (Thomas) 4-16, Herder 1-1, Hoffmann (E.T.A.) 1-3, Hofmannsthal (Hugo von) 2-5, Hudson (Stephen) (→ Sydney Schiff) 3-9, Joyce (James)</p>

	2-2, Keats (John) 4-5, Kipling (Rudyard) 5-9, Leopardi (Giacomo) 1-1, Levenson (Ada) 3-3, Maeterlinck (Maurice) 17-81, Mansfield (Katherine) 1-1, Meredith (George) 2-3, Milton 2-5, Moore (Thomas) 1-1, Novalis 2-3, Pater (Walter) 4-7, Poe (Edgar Allan) 7-9, Poliziano (Angelo) 1-1, Pouchkine 1-3, Reshnetnikov (Fedor) 1-1, Richardson (Dorothy Miller) 1-1, Rilke 1-1, Rod (Edouard) 15-22, Ruhe (Algot) 5-5, Schiff (Sydney) 8-11, Schiller (Friedrich) 3-5, Scott (Charles Newton) 2-3, Scott (Walter) 2-2, Shakespeare 19-68, Shelley (Percy Bysshe) 1-1, Sienkiewicz (Henryk) 1-1, Stevenson 17-40, Swift (Jonathan) 1-1, Tagore 2-2, Tasse (Ie) 1-1, Tchekhov 3-3, Thomas a Kempis 1-3, Thoreau (Henry David) 1-3, Tolstoï 9-29, Verhaeren (Emile) 1-2, Wells (H.G.) 12-34, Wharton (Edith) 2-2, Whitman (Walt) 2-2, Wilde (Oscar) 7-17
哲学・思想	Aristote 3-5, Bergson (Henri) 4-8, Brunshvich (Léon) 1-3, Carlyle (Thomas) 2-4, Descartes 2-7, James (William) 1-1, Kant 1-2, Kessler (Harry von) 4-7, Leibnitz 1-7, Mâle (Emile) 14-24, Michelet (Jules) 11-18, Mill (John Stuart) 2-3, Nietzsche 1-2, Pascal 3-22, Platon 5-10, Plutarque 1-1, Renan (Ernest) 10-27, Ruskin (John) 56-766, Schopenhauer 4-6, Spinoza 3-4, Taine (Hippolyte) 2-3, Vitruve 1-1
美術	Botticelli 1-1, Burne-Jones (Edward) 1-1, Carpaccio 5-11, Chardin 3-3, Corot (Camille) 1-1, Couture (Thomas) 1-1, Cuyp (Albert) 1-1, Degas (Edgar) 1-1, Delacroix (Eugène) 2-3, <i>Denis (Maurice)</i> 2-2, Dethomas (Maxime) 11-12, Dürer (Albrecht) 1-1, Fra Angelico 1-1, Franck (Franz) 2-3, Flinck (Govaert) 1-3, Giotto 1-2, Greco (Le) 1-3, Helleu (Paul) 3-12, Ingres (Dominique) 2-2, La Tour (Maurice Quentin de) 1-1, Léonard de Vinci 5-12, Manet 6-13, Mantegna 1-1, Memling (Hans) 1-1, Millet (Jean-François) 1-1, Monet 8-15, Moreau (Gustave) 10-11, <i>Morris (William)</i> 1-1, Phidias 1-1, Pisanello 1-1, Praxitèle 1-1, Rembrandt 4-6, Rodin (Auguste) 1-1, Rossetti (Dante Gabriel) 4-8, Rubens 1-1, Rude (François) 1-1, Sargent (John Singer) 2-2, Sisley (Alfred) 1-1, Tintoret (Ie) 1-1, Titien 2-2, Turner (William) 5-7, Van der Weyden (Roger) 1-1, Van Dyck (Antoine) 2-3, Velásquez 2-2, Vermeer 6-18, Watteau (Antoine) 2-3, Whistler 16-26
音楽	Adam (Adolphe) 2-3, Auber (Daniel) 2-4, Beethoven 24-64, Berlioz (Hector) 6-12, Bizet (Georges) 5-14, Borodine (Alexandre) 4-6, Brahms 3-3, Chabrier (Emmanuel) 4-8, Charpentier (Gustave) 1-3, Chopin 7-12, Christiné (Henri) 1-2, Couperin (François) 1-1, Debussy (Claude) 11-52, Delafosse (Léon) 6-13, Fauré (Gabriel) 23-41, Franck (César) 6-18, Glinka 1-3, Gluck 2-2, Gounod (Charles) 9-20, <i>Hahn (Reynaldo)</i> 53-137, Halévy (Fromental) 3-9, Herold (Ferdinand) 1-1, Hollaender (Victor) 1-5, Holmès (Augusta) 5-8, Indy (Vincent d') 3-8, Lenepveu (Charles) 1-2, Leoncavallo (Ruggiero) 1-1, Liszt (Franz) 1-2, Massenet (Jules) 6-15, Mendelssohn 2-2, Métra (Olivier) 1-1, Meyerbeer 2-2, Milhaud (Darius) 3-6, Moussorgsky 3-18, Mozart 4-17, Offenbach 4-4, Palestrina 1-1, Perosi (Lorenco) 2-2, Rameau (Jean-Philippe) 3-3, Ravel (Maurice) 4-4, Reyer (Ernest) 3-5, Rimski-Korsakov 5-24, Rossini 3-3, Saint-Saëns 8-19, Satie (Erik) 2-3, Schumann (Robert) 16-19, Strauss (Richard) 3-14, Stravinski (Igor) 6-16, Tchaïkovski 1-1, Terrasse (Claude) 2-8, Thomas (Ambroise) 2-2, Verdi 2-5, Wagner 22-136

【表2】ジャンル別および時代別頻度順位

文学 (17世紀)		
1	Racine	12-123
2	La Fontaine	34-110
3	Molière	20-105
4	Corneille	7-35
5	Saint-Simon	2-31

文学 (19世紀)		
1	Baudelaire	50-218
2	Hugo	57-178
3	Balzac	46-135
4	Musset	43-98
5	Flaubert	13-98
6	Vigny	16-78
7	Goncourt	8-63
8	Sainte-Beuve	18-56
9	Verlaine	23-50
10	Sully Prudhomme	23-50

文学 (同時代)		
1	Montesquiou (Robert de)	250-810
2	Noailles (Anna de)	106-299
3	Morand (Paul)	31-164
4	Blanche (Jacques-Emile)	35-147
5	France (Anatole)	54-144
6	Gregh (Fernand)	60-138
7	Barrès (Maurice)	57-135
8	Gide (André)	25-122
9	Daudet (Lucien)	35-91
10	Cocteau (Jean)	39-87

古代ギリシャ・ローマ		
1	Virgile	5-40
2	Homère	2-22
3	Horace	7-20
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		

Rivière (Jacques) 18-71
 Régnier (Henri de) 39-70
 Daudet (Julia) 30-69
 Dreyfus (Robert) 26-60
 Boylesve (René) 20-51

外国文学		
1	Maeterlinck	17-81
2	Shakespeare	19-68
3	Stevenson	17-40
4	H.G.Wells	12-34
5	Dostoïevski	4-33
6	D'Annunzio	11-32
7	Tolstoï	9-29
8	Eliot (George)	5-26
9	Rod (Edouard)	15-22
10	Emerson	15-21

哲学・思想		
1	Ruskin	56-766
2	Renan (Ernest)	10-27
3	Mâle (Emile)	14-24
4	Pascal	3-22
5	Michelet	11-18
6	Platon	5-10
7	Bergson	4-8
8	Descartes	2-7
9	Leibnitz	1-7
10	Schopenhauer	4-6

美術		
1	Whistler	16-26
2	Vermeer	6-18
3	Monet	8-15
4	Manet	6-13
5	Dethomas (Maxime)	11-12
6	Léonard de Vinci	5-12
7	Helleu (Paul)	3-12
8	Moreau (Gustave)	10-11
9	Carpaccio	5-11
10	Rossetti	4-8

音楽		
11	Wagner	22-136
12	Beethoven	24-64
13	Debussy	11-52
14	Fauré	23-41
17	Rimski-Korsakov	5-24
16	Gounod	9-20
17	Schumann	16-19
18	Saint-Saëns	8-19
19	Moussorgsky	3-18
20	Mozart	4-17

【表3】作者別頻度総合順位（文学）

1	Montesquiou (Robert de)	250-810	11	Racine	12-123
2	Noailles (Anna de)	106-299	12	Gide (André)	35-122
3	Baudelaire	50-218	13	La Fontaine	34-110
4	Hugo	57-178	14	Molière	20-105
5	Morand (Paul)	31-164	15	Musset	43-98
6	Blanche (Jacques-Emile)	35-147	16	Flaubert	13-98
7	France (Anatole)	54-144	17	Daudet (Lucien)	35-91
8	Gregh (Fernand)	60-138	18	Cocteau (Jean)	39-87
9	Barrès (Maurice)	57-135	19	Vigny	16-78
10	Balzac	46-135	20	Rivière (Jacques)	18-71

【表4】作品別頻度総合順位

1	<i>Sésame et les Lys</i>	Ruskin	310
2	<i>Bible d'Amiens (La)</i>	Ruskin	240
3	<i>Fleurs du mal (Les)</i>	Baudelaire	85
4	<i>Journal des Goncourt</i>	Les frères Goncourt	51
5	<i>Fables</i>	La Fontaine	50
6	<i>Tendres Stocks</i>	Morand (Paul)	43
7	<i>Phèdre</i>	Racine	41
	<i>Education sentimentale (L')</i>	Flaubert	41
9	<i>Propos de peintre. De David à Degas</i>	Blanche (Jacques-Emile)	40
	<i>Chauves-souris</i> など	Montesquiou	40
11	<i>Pierres de Venise (Les)</i>	Ruskin	39
12	<i>Pelléas et Mélisande</i>	Debussy	31
	<i>Ginette Chatenay</i>	Lauris (Georges de)	31
14	<i>Mémoires</i>	Saint-Simon	30
15	<i>Age d'or (L')</i>	Gregh (Fernand)	27
16	<i>Mais l'art est difficile</i>	Boulenger (Jacques)	26
17	<i>Enéide</i>	Virgile	25
18	<i>Maîtres Chanteurs de Nüremberg</i>	Wagner	24
19	<i>Mémoires d'outre-tombe</i>	Chateaubriand	23
	<i>Misanthrope (Le)</i>	Molière	23

1. フランス文学の時代別分類に基づく分析

全体的な傾向として、17世紀、19世紀、同時代の作品の頻度数が高いのに比べて、中世、16世紀、18世紀の作品の頻度は極めて低い。中世、16世紀のような古い時代の文学作品は伝えられているものも多くなく、言及される作品数や回数が少なくても不思議はないであろう。ところで、17世紀と18世紀を比較してみると、作者の数は前者が17人、後者が18人で、ほぼ同数であるが、頻度は極端に異なる。18世紀で比較的よく言及されているルソー（4-11）、ヴォルテール（9-18）と17世紀のラシーヌ（12-123）、モリエール（20-105）、ラ・フォンテーヌ（34-110）を比べてみても、その差は歴然としており、文字通り桁違いである。アントワヌ・コンパニオンもプルーストの文学的教養の幅広さについて触れながら、18世

紀文学に対して関心の低いことを指摘しているが、⁽⁶⁾書簡集の統計を見てもそのことは明らかである。このような傾向の理由は何であろうか。一つにはプルーストの時代の一般的な文学観あるいは学校における文学教育の傾向を反映しているとも言えよう。古典文学とはあくまで17世紀の作品であり、よく読まれる小説や詩は19世紀の作家のものである。また、プルーストの個人的な嗜好にもよるであろう。実のところ、18世紀の小説の歴史をたどるなら、その中心をしめていたのは回想録体小説や書簡体小説というような一人称体の小説であって、17世紀の普遍性、理性に対して、18世紀は「私」という個性を見だし、個人の感情を表現し始めた時代であり、19世紀のロマン主義に直接的につながりながら、その主観性、相対性あるいは語りの構造などは20世紀の小説と類似した側面も多いのだ。しかしながら、18世紀の小説は、まだ旧体制時代の時間感覚を反映しているのか、その冗長さのせいで革命後の近代の読者にはほとんど読まれなくなった。一般的に言って、18世紀はデイドロ、ヴォルテール、ルソーを代表とする「哲学の世紀」あるいは「啓蒙の世紀」である。18世紀最大のベスト・セラーになったルソーの『新エロイズ』も、次世代のロマン主義時代の作家たちにとっては小説の模範として愛読されたが、それ以降はあまり読まれなくなった。いずれにせよ、社会改革をめざした実践的、実用的な知性はプルーストの文学観・芸術観とはおおいに異なるものであろう。

それに対して、17世紀古典主義時代の作品が言及される頻度が相当高く、上位のラシーヌ、ラ・フォンテーヌ、モリエールは表3に見られるように、19世紀の大作家であるユゴーやバルザックに比べても遜色がない。表4の作品別頻度総合順位を見ても、ラ・フォンテーヌの『寓話』が5位、『失われた時を求めて』においてラ・ベルマが演じることになっているラシーヌの『フェードル』も7位というように上位を占めている。プルーストはラ・ブリュイエールやラ・ロシュフーコーなどのモラリスト文学よりも古典演劇や『寓話』の方によく通曉していたように思われるが、実際これらの古典作品については、必ずしも正確ではないが、引用の形をとることが圧倒的に多い。実のところ、手紙や会話において、このような古典時代の文学作品の引用や暗示をすることができるのは文化的教養人の証でもあり、また学校教育、家庭教育の成果でもある。

19世紀の著名な作家たちはほぼすべてプルーストの書簡に登場していると言ってよい。表2の「文学 (19世紀)」の項目を見ると、『サント＝ブーヴに反論する』の中で考察の対象となっているボードレル、バルザック、フローベール、そしてもちろんサント＝ブーヴが頻度数上位に挙がっている。ネルヴァルに対する言及も少なくないが(11-23)、プルーストは『オーレリア』を読んでいたかどうかという謎については、書簡を調べる限りでは否定的にならざるをえない。彼自身は手紙の中でネルヴァルのこの問題作のことに全く触れていないのだ。ところで、19世紀は小説の世紀と言われるほど大小説家が輩出した時代であり、プルー

ストは上記のバルザック、フローベール以外にも、スタンダール、ゾラなどの小説家に言及することは確かに多い。しかしながら、頻度順の10位までに詩人が6人も入っているのは興味深いことである。ボードレールとユゴーが1, 2位を独占し、その他ミュッセ、ヴィニー、ヴェルレーヌ、スュリ・プリュドムが上位を占めている。プルーストは小説以上に詩を好んでいたようにも見えるが、1888年5月に友人ダニエル・アレヴィーに宛てて、次のように書いている。

「今世紀において私が特に好きなのは、ミュッセ、ユゴー翁、ミシュレー、ルナン、スュリ・プリュドム、ルコント・ド・リール、アレヴィー、テーヌ、ベック、フランス。それからバンヴィル、エレディア、マラルメ、ヴェルレーヌ。」⁽⁷⁾

リセ・コンドルセに通っていた17歳のプルーストはとりわけ詩を好んでいたように思われる。友人のロベール・ドレフュスはリセ時代に、詩を記憶するプルーストの力に驚嘆しているほどだ。⁽⁸⁾ところでここに挙げられている19世紀の作家の中に、後に『サント＝ブーヴに反論する』において扱われるボードレール、バルザック、フローベール、ネルヴァルが全く見られないのは注目に値することである。確かに、若い頃と成熟した頃とで文学に対する嗜好も見方も変化しているとも言えるが、これら4人の作家はとりわけプルースト自身の文学創造と密接に関連している。といっても、ロマン派や象徴派の詩人たちに対する言及が若い時代の書簡に限られているわけではなく、たとえばミュッセに関して見れば、確かに詩人に対する見方は変化するが、生涯にわたって書簡の中で言及、引用されている。手紙において詩が多く引用されることは、観点を換えれば、ちょうど古典文学と同様に教養人の証であるとも言えよう。古典劇や『寓話』と同じように、詩もまた暗唱されるものである。

書簡はその時代の証言とも言えるが、プルーストの書簡においても同時代に発表された文学作品に対する言及はやはり多数にのぼる。表2の「文学(同時代)」の頻度順を見れば、同時代の作家といっても、ロベール・ド・モンテスキウ、アンナ・ド・ノワイユ、ポール・モランをはじめとして上位を占めるのはすべてプルーストの知り合いや友人なのである。彼のもとに送られてくる作品や発表されたばかりの知り合いの作品について賛辞、感想、批評などを述べている手紙が多く残されており、これら同時代の作家に対する言及はしたがって彼の文学的嗜好を表しているというよりも、彼の社交性を示していると言えよう。実際、モンテスキウやノワイユ夫人などの社交界の著名人に対しては常に賛辞を書き送っている。ただし、友人の著作についての彼の感想や批評は、プルーストが文学において何に注目するのかわかる上でとても興味深く、彼の批評方法を垣間見せてくれる貴重な資料である。

2. 外国文学

プルーストは外国文学の中で、特にどの国の文学を好んだのであろうか。1910年3月、彼はロベール・ド・ビイに宛てて、次のように書いている。

「不幸にも私が書いているものにいささか似ている（はるかによくできている）とても美しい作品を読んだところです。それはトーマス・ハーディの『恋人』です。それには大作につきもののちょっとしたグロテスクな面も欠けてはいません。リスターと話をする機会がありましたら、トーマス・ハーディとバリーを知っているかどうか、彼らがどんな人間なのか、社交家なのか、女好きか、など尋ねてください。奇妙なことに、ジョージ・エリオットからハーディ、スティーヴンソンからエマーソンというように、異なるあるゆるジャンルにおいて、イギリスあるいはアメリカの文学ほど私に強い影響力のある文学はありません。ドイツ、イタリア、しばしばフランスの文学に対しても私は関心が持てないのです。けれども、『フロス河畔の水車場』の2ページを読むだけで涙が出ます。ラスキンがこの小説を嫌っていることは知っていますが、私の称賛の神殿の中でこれらの敵対するすべての神々を和解させるの⁽⁹⁾です。」

この有名な書簡において、プルーストはアングロ・サクソン系の文学に対する好みを言明している。さて、表1の「外国文学」の項目に挙げられた外国の作家たちを国別に分類すると以下のようなになる。

総人数	65人
イギリス	33人
ドイツ	9人
アメリカ	5人
イタリア	5人
ロシア	5人
ベルギー	3人
その他	5人

実にイギリスの作家が全体の半数を占めており、アメリカの作家を合わせると半数を超えることになる。表2の「外国文学」の頻度順の上位10人の中には、シェイクスピア、スティーヴンソン、H.G. ウェルズ、ジョージ・エリオット、エマーソンという5人のイギリス・アメリカの作家が含まれており、半数がアングロ・サクソン系の作家なのである。プルーストがその生涯において最も影響を受けた作家の筆頭はもちろん同じく英国のジョン・ラスキンであろう。われわれの統計表では「哲学・思想」に分類しているが、[56-766] という頻度数

はモンテスキウの〔250-810〕に次いで多く、他を圧倒している。しかしながら、英語圏の作家をとりわけ好んでいたといっても、プルーストは英語が堪能であったわけではない。彼がリセ時代に学んだ外国語は、当時の大多数の生徒たちと同じようにドイツ語であった。したがって彼は英国の作品を翻訳で読んだのだが、ただラスキンに関してはまだフランス語訳が存在していなかったために英語を学ぶようになったらしい。彼はラスキンの『アミアンの聖書』（1904年）と『胡麻と百合』（1906年）の翻訳を出版しているが、前者は母親、後者はマリー・ノードリンガーの下訳を元にフランス語に訳したのだった。

しかしながら英文学に対する好みは生涯を通じて持ち続けており、英語が堪能で英文学によくなじんでいた母親の影響もあったのであろう、子供の頃にはジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』やステューヴンソンの冒険物語に親しみ、ディケンズ、シェイクスピアも既に読んでいた。『楽しみと日々』の中でよく引用されているエマーソンの『エッセー』は彼の青年時代の枕頭の本であった。またジャック＝エミール・ブランシュの紹介でオスカー・ワイルドを知り、カーライルを読んだ。その後ラスキン時代が数年続くが、その間ウォルター・ペイターにも興味を持つ。さらにはローレンス・スターン、ポー、キップリング、H. G. ウェルズ、トーマス・ハーディ、バリー、メレディス、サッカレー、ヘンリー・ジェームズというようにアングロ・サクソン系の作家に対する興味は一生途切れることはない。アングロ・サクソン作家とプルーストとの関連を論じたピエール＝エドモンド・ロベールによる⁽¹⁰⁾と、思想面においては、彼が嫌ったフランス18世紀の思想と対立するドイツ観念論哲学の影響下にある思想家を好み、また小説に関しては、ほとんどが19世紀の作家たちを好んで読んでいる。上で引用した書簡において、プルーストはイギリス・アメリカのあらゆるジャンルの作品を好むと言明しているように、ジョージ・エリオットやハーディの小説、ステューヴンソンの冒険物語、エマーソンの哲学、ラスキンの美学など確かに多岐に渡っている。しかし興味深いのは意外にもイギリスの詩人に対する言及や引用がほとんどないことである。バイロン、キーツなどがわずかに言及されているだけである。上で見たように、フランスにおいて「小説の世紀」とも呼ばれる19世紀に関しても、プルーストは小説家に劣らず、あるいはそれ以上に詩を好んでいたように思われるのはまさしく対照的である。翻訳では詩の本物の魅力を味わえなかったのかも知れないが、プルーストがとりわけ親しんでいたのはイギリス・アメリカ文学の散文であったと言えよう。

3. 美術・音楽

近年とりわけ日本においては、吉川一義氏をはじめとしてプルーストと絵画の関連について論じる研究者が多い。⁽¹¹⁾特にプルーストがある作品をいつ、どこで見たかというような実証的な論証をする上で書簡は不可欠な資料となっている。表2の「美術」の頻度順位を見ても、

ホイッスラー、フェルメール、モネ、マネ、モロー、カルパッチオなどプルースト研究者になじみの深い画家たちの名が上位を占めている。しかしながらそれらの作品数や頻度数を見れば分かるように、絵画作品に対する言及は意外に少ない。といってもそれはプルーストの絵画に対する関心度の低さを示しているわけでないことは言うまでもない。文学作品に比べて、絵画の作品名は流布しにくいことに起因しているのであろう。美術に関してはむしろ人名索引に基づいて統計を取る方が適当かも知れない。作品に対する言及の頻度数が高い上位10人の画家についてのみ人名索引を調べると、その言及頻度数は以下のようになり、順位もかなり入れ替わる。

1. Helleu (Paul)	64
2. Whistler	60
3. Manet	50
4. Vermeer	40
Moreau (Gustave)	40
6. Monet	39
7. Léonard de Vinci	35
8. Carpaccio	30
9. Rossetti	17
10. Dethomas (Maxime)	16

プルーストの書簡において言及されている作品はわずか3点だけであったポール・エルー(1859-1927)が人名の頻度数ではホイッスラーを抜いて1位となる。エルーは海洋画や海辺の風俗画を得意とした画家で、プルーストは1907年カブールで知り合い、親しく交際したようだ。ポール・エルーは『失われた時を求めて』に登場する海洋画家エルスチールの主要なモデルの一人であり、Elstir という名前も Helleu と Whistler の名前を組み合わせただと言われている。このように、必ずしも作品に対する芸術的関心からではないが、交際があった画家に対しては言及が多くなるのは当然であろう。

音楽についてはまた国別に分類してみることは無意味ではなかろう。というのも、造形芸術に比べて音楽は国民性がよく現れるジャンルだからだ。とりわけロマン派以降はその傾向が顕著である。

総人数	53人
フランス	31人
ドイツ	9人

ロシア	6人
イタリア	5人
その他	2人

全体の6割をフランスの作曲家が占めているのは注目に値する。音楽史的に言って、18世紀、19世紀の古典主義からロマン主義に至る時代はドイツ音楽が主流であったが、プルーストは音楽に関しては愛国主義者だったのであろうか。しかし、レコードの存在しなかった当時は、生の演奏によってしか音楽を聞くことができなかつたわけで、普仏戦争、第一次世界大戦において敵国であったドイツの音楽がフランスで演奏される機会が少なかつたのではないか。表2の「音楽」の頻度順位を見れば、ドビュッシー、フォーレというフランスの作曲家を越えて、とりわけドイツ的、ゲルマン的とも言えるワーグナー、ベートーヴェンが1、2位を占めている。19世紀末から20世紀初頭にかけてのワーグナーに対するヨーロッパ全体の熱狂はよく知られていることで、プルーストも例外ではなかつた。『失われた時を求めて』の創作途上においてはワーグナーのオペラが重要な役割を果たしており、シャルリュス男爵（当時はゲルシー男爵）の同性愛的傾向が暴露されるのはワーグナーの楽劇が演奏される劇場においてであり、⁽¹²⁾また芸術の啓示が語り手にもたらされる『見出された時』の最終場面において、ゲルマント大公夫人のサロンで演奏されているのは『パルシファル』の「聖金曜日(13)の不思議」なのである。またプルーストは特に晩年においてベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲を聞くためにわざわざ自宅に演奏家を招いて自分のためにだけ演奏させているほどである。⁽¹⁴⁾

プルーストはとりわけオペラを好んでいたように思われる。ワーグナーをはじめ、ドビュッシー（『ペレアスとメリザンド』）、グノー、マスネ、ビゼー、ムソルグスキーなどオペラ作品に対する言及が多い。ロシア・バレエの流行ともあいまって、ロシア音楽についての言及は少なくないが、イタリア音楽にはほとんど興味を示していない。またバッハ、ヘンデルといったバロックの巨匠の作品への言及は皆無であるが、おそらく当時はバロック音楽が演奏されることはまれだったのであろう。

4. 年代から見た作品頻度数の推移

表4に作品別頻度数の上位20作品を掲げた。分類してみると以下のようになる。

- 1) ラスキンの作品 (*Sésame et les Lys, La Bible d'Amiens, Les Pierres de Venise*)
- 2) 古典時代の作品 (*Fables, Phèdre, Mémoires, Le Misanthrope*)
- 3) 19世紀の作品 (*Les Fleurs du mal, Journal des Goncourt, L'Education sentimentale, Mémoires d'outre-tombe*)

- 4) 同時代の作品 (*Tendres Stocks, Propos de peintre, Chauves-souris, Ginette Chatenay, L'Age d'or, Mais l'art est difficile*)
- 5) オペラ作品 (*Pelléas et Mélisande, Maîtres Chanteurs de Nuremberg*)
- 6) 古代ローマの作品 (*Éneide*)

これら頻度数の高い作品を例にとりて、年代的推移を見ても無意味ではないだろう。言及される回数が多くても、ある時期に集中している場合もあれば、生涯にわたっている場合もある。コルブ編纂の『書簡集』は年代順に並べられているので、各巻の頻度数を以下の表で示す。なおこの場合、コルブの序文における作品への言及は省略した。またこの『書簡集』には後から発見された手紙が、異なる年代の巻に付録として付けられているが、それらはもちろん本来の年代に戻した上で頻度数を示す。

年代別作品頻度数

I (1880-1895), II (1896-1901), III (1902-1903), IV (1904), V (1905), VI (1906), VII (1907), VIII (1908), IX (1909), X (1910-1911), XI (1912), XII (1913), XIII (1914), XIV (1915), XV (1916), XVI (1917), XVII (1918), XVIII (1919), XIX (1920), XX (1921), XXI (1922)

(1) *Sésame et les Lys* (Ruskin)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1	3	4	30	41	45	20	4	1	2	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
5	2	5	1	2	4	4	4	1	0	4

(2) *La Bible d'Amiens* (Ruskin)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	17	45	74	15	15	9	8	3	4	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	3	1	1	3	0	3	4	2	0	1

(3) *Les Fleurs du mal* (Baudelaire)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1	4	5	5	5	3	9	2	1	6	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	1	2	2	1	3	3	2	8	13	5

(4) *Journal des Goncourt* (Goncourt)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
12	8	0	2	1	1	0	0	2	3	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	2	2	3	4	1	1	2	3	1	0

(5) *Fables* (La Fontaine)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1	5	3	1	5	6	3	0	1	2	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
4	1	2	5	1	0	3	2	1	3	0

(6) *Tendres Stocks* (Paul Morand)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	1	1	0	0	0	0	19	15	5

(7) *Phèdre* (Racine)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
4	5	4	1	2	0	0	1	1	1	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	0	0	1	0	1	0	6	5	5	1

(7) *L'Education sentimentale* (Flaubert)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	1	0	0	1	1	0	2	2	5	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
5	6	1	0	0	0	1	6	8	1	

(9) *Propos de peintre. De David à Degas* (Jacques-Emile Blanche)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	1	0	0	0	6	12	12	2	3	1

(9) *Chauves-souris* (Robert de Montesquiou)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
21	1	1	0	0	0	11	1	0	2	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0

(11) *Les Pierres de Venise* (Ruskin)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	1	0	10	2	5	3	2	0	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0

(12) *Pélleas et Mélisande* (Debussy)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	0	1	2	0	1	0	1	1	14	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
3	3	0	0	0	1	0	1	1	0	0

(12) *Ginette Chatenay* (Georges de Lauris)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	0	0	0	0	0	0	2	8	15	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(14) *Mémoires* (Saint-Simon)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	1	0	0	1	2	1	1	1	3	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	0	1	3	2	3	2	4	3	

(15) *L'Âge d'or* (Fernand Gregh)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
8	4	1	4	2	0	0	1	1	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	1	2	0	1	0	0	1	0	1

(16) *Mais l'art est difficile* (Jacques Boulenger)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	0	0	0	0	0	1	2	21	2

(17) *Enéide* (Virgile)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
2	0	0	0	1	0	0	0	0	2	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
1	0	0	0	2	2	2	5	2	3	2

(18) *Maîtres Chanteurs de Nüremberg* (Wagner)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
2	0	0	0	0	0	3	0	0	9	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	2	2	2	0	1	0	0	2	0	0

(19) *Mémoires d'outre-tombe* (Chateaubriand)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
1	1	1	2	0	0	0	2	1	1	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	1	0	1	2	2	0	3	2	0

(19) *Le Misanthrope* (Molière)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	
2	7	2	1	2	0	1	0	1	0	
XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	XIX	XX	XXI
0	0	1	0	1	0	3	0	0	0	1

圧倒的に頻度数が高いラスキンの『胡麻と百合』と『アミアンの聖書』の二著はプルースト自身が翻訳したからであることは言うまでもない。前者の方が後者よりもかなり言及回数が多いのは、『アミアンの聖書』は母親が下訳をしたので、プルーストとの間で手紙のやりとりが必要でなかったのに対して、『胡麻と百合』はレーナルド・アーンの従姉妹にあたるマリー・ノードリンガーの協力によるものなので、彼女との間で書簡のやりとりがあったためであるということは容易に推測できる。『アミアンの聖書』が1904年、『胡麻と百合』が1906年に出版されているため、出版年を頂点にして、その2年ほど前から増加して、出版後1年以上経つと急激に減る。

同時代の作品については、当然のごとくその出版年に集中しており、その後は急速に減少するか、あるいは一切言及されなくなる。これは上でも述べたように、同時代の文学作品のほとんどが友人や知り合いのもので、手紙で批評や賛辞を書き送るといった社交的な活動であることを示している。音楽作品もまたプルーストがそれを聞いた時期と手紙における言及と一致しているのは当然であろう。ワーグナーの『ニューレンベルクのマイスタージンガー』とドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』というオペラ二作品は特に第10巻において多く言及されているが、それはプルーストはいわゆるテアトロフォン⁽¹⁵⁾で、1911年2月に前者を、そしてその翌日に後者を聞いたことに起因している。

ボードレールの『悪の華』やフローベールの『感情教育』のような古典的で、しかもプルーストが多くの感化を受けている名作はほとんど各時代に渡っている。この二作がそれぞれ19巻、20巻、あるいは18巻、19巻において頻度数が上がっているのは、大戦後に『フローベールの文体について』(1920年)、『ボードレールについて』(1921年)を発表したことがその理由である。プルーストがボードレールに興味を持ち始めるのは20歳の時のことで、決して早くはなく、上で見た17歳の時の書簡にも、多くの19世紀の詩人を挙げながら、ボードレールの名はまだ出てこないのである。『感情教育』に対する言及は晩年以外に、1911年から1913年にかけて比較的多く見受けられるが、『失われた時を求めて』の創作となにか関連があるのだ

ろうか。ゴンクール『日記』とモリエールの『人間嫌い』は若い頃に頻度が高く、ラシーヌの『フェードル』は青年時代と晩年に言及が多い。またサン＝シモンの『回想録』と『アエネイアス』はむしろ後半生に言及回数が増えている。このような頻度数の推移の理由は全体を見渡しているだけでは明らかではなく、個別に調べる必要がある。

『プルースト書簡集』において言及されている文学・芸術作品の頻度数の統計をとることによって、たとえばプルーストはフランス18世紀文学に対する興味が乏しいのに比して、イギリス文学には生涯にわたって関心を持ち続けている。アングロ・サクソン系の文学を好むことはプルースト自身が言っていることでもあるし、「啓蒙の世紀」の思潮には無関心であることは研究者によって既に指摘されていることでもある。しかし、『書簡集』に基づく統計によってそれらのことを裏付けたことは無意味ではないであろう。プルーストにとって最も親しいフランス19世紀文学については、小説に劣らず詩に対する嗜好が強いが、他方イギリス文学に関しては、詩に対する興味が乏しく、19世紀の小説・思想に強い共感を示していることが統計的分析によっても分かる。美術作品についてこのような方法は必ずしも有効ではないが、手紙における音楽作品への言及は意外なほどフランスの作曲家のものが多い。しかしそのような全般的な傾向にもかかわらず、ワーグナー、ベートーヴェンというとりわけゲルマン的な作曲家に熱中していた。半分はユダヤ民族の血が流れるプルーストの文学・芸術的嗜好はラテン、ゲルマン、アングロ・サクソンという民族の壁を越える広がりを持っている。各作品、各作家に対する好みや見方の変化を知るには、それぞれ個別に調査する必要があることは言うまでもない。また『失われた時を求めて』の中で言及あるいは暗示されている文学・芸術作品と比較するならば、作家の教養と創作との関係に光を当てることも可能であろう。

注

- (1) たとえば、1907年にフィガロ紙に掲載した「自動車旅行印象記」(«Impressions de route en automobiles»)を、1912年夏にプルーストは友人のアントワーヌ・ビベスコから借りている (*Correspondance de Marcel Proust*, éditée par Philip Kolb, 1970-1993, Tome XI, p. 177)
- (2) プルーストは『見出された時』において、書物を物質的に所有しようとする愛書家を引き合いに出しながら、書物は精神的に所有すべきものであることを主張している (*A la recherche du temps perdu*, «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989, Tome IV, pp. 465-467.)
- (3) Ghislain de Diesbach, *Proust*, Perrin, 1991; Michel Erman, *Marcel Proust*, Fayard, 1994; Roger Duchêne, *L'impossible Marcel Proust*, Robert Laffont, 1994; Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, Gallimard, 1996.
- (4) *Index général de la Correspondance de Marcel Proust*, édité par Kazuyoshi Yoshikawa, Presses de l'Université de Kyoto, 1998.

- (5) Julie Lambilliotte, «La Bibliothèque de Marcel Proust: de la lecture à l'écriture», *Bulletin d'Informations Proustiennes*, No. 30, pp. 81-89.
- (6) アントワーヌ・コンパニオン「偉大なる作家」(鈴木道彦訳『失われた時を求めて』第5巻「ゲルマントの方I」)月報, 集英社, 1998.
- (7) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome XXI, p. 552.
- (8) Robert Dreyfus, *Souvenirs sur Marcel Proust*, Bernard Grasset, 1926, p. 16.
- (9) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome X, pp. 54-55.
- (10) P.-E. Robert, *Marcel Proust lecteur des Anglo-Saxons*, Nizet, 1976, p. 12.
- (11) 吉川一義『プルースト美術館』, 筑摩書房, 1998; Yasuë Kato, *Études génétique des épisodes d'Elstir dans A la recherche du temps perdu*, Surugadai-Shuppansha, 1998. 等々。
- (12) *A la recherche du temps perdu*, III, pp. 943-960.
- (13) *Ibid.*, IV, pp. 825-826.
- (14) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome XIX, p. 685, p. 689.
- (15) テアトロフォンとは1890年頃から始まった電話サービスで, 加入者はいくつかの劇場で催されているオペラ, 演奏会, 演劇などを電話で聴取することができた。

La culture littéraire et artistique de Marcel Proust

—Un essai d'analyse statistique sur la *Correspondance de Marcel Proust*—

Akio WADA

La *Correspondance de Marcel Proust*, éditée par Philip Kolb, nous fournit un moyen efficace d'évaluer les connaissances fort étendues de Proust sur la littérature et l'art. Nous avons pris dans ce but les statistiques des titres d'œuvres et des noms d'auteurs, basées sur l'*Index général de la Correspondance de Marcel Proust*, qu'a édité Kazuyoshi Yoshikawa avec d'autres chercheurs japonais.

Notre analyse statistique nous confirme que Proust a peu d'intérêt pour la littérature française du XVIII^e siècle, et d'autre part qu'il garde une prédilection durant toute sa vie pour la littérature anglo-saxonne, d'autant que plus de la moitié des écrivains étrangers mentionnés dans sa correspondance sont anglais ou américains. On remarque d'ailleurs qu'il n'a pas moins de goût pour la poésie que pour le genre romanesque en ce qui concerne la littérature française du XIX^e siècle avec laquelle il se familiarise le plus, tandis que la poésie anglaise, à la différence de la prose du même pays, ne suscite chez lui, chose curieuse, aucun intérêt. Ce sont, en matière de musique, des compositeurs français qui y sont mentionnés le plus fréquemment. Notre écrivain était engoué pourtant pour Wagner et Beethoven, musiciens typiquement germaniques. Ainsi le goût littéraire et artistique de Proust, à moitié juif, couvre-t-il une étendue très vaste qui franchit la barrière des races (latine, germanique, anglo-saxonne, etc.)